

通常の学級におけるユニバーサルデザイン授業の発信

～平成 23・24 年度京都府総合教育センタープロジェクト研究の成果を活かす～

鋒山 智子 野田 基子 小林 利恵子
(特別支援教育部)

要約

平成 23・24 年度の研究として、授業づくりに特別支援教育の視点を加味し、発達障害等のある子どもが学びやすいように授業を改善する、それが結果的にすべての子どもたちにわかりやすい授業になるという仮説のもと、京都府公立小学校 2 校を研究協力校とし、プロジェクトチームを結成して取り組んだ。全校で取り組むユニバーサルデザインの研究は、子どもたちにとって授業ばかりでなく、学校生活全体がわかりやすくなる取組となった。

センターでは本年度この研究を受け、さまざまな機会を活用し、全校種でのユニバーサルデザインの授業づくり、全ての子どもがわかりやすい授業づくりを進める発信を続け、府内全域にユニバーサルデザイン授業の視点を広めている。

キーワード：ユニバーサルデザイン授業、通常の学級、授業づくり、発信

1 問題と目的

平成19年度に特別支援教育が法的に位置づけられ、各校（園）で校内委員会の設置やコーディネーターの指名などの体制整備が進められる中、発達障害等の障害や特性に対する理解も進んできた。その一方で、通常の学級担任が、40人の子どもたちがいる学級集団の中で、さまざまな子どもの特性に応じた適切な指導・支援をどのように工夫していけばいいのだろうかと悩む現状もある。

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」（平成 24 年 7 月中央教育審議会報告）では「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要である。」と述べている。合理的配慮についても今後それぞれのケースに応じて検討していく必要がある。

このような状況の中で、発達障害等のある子どもを含めて、どの子にもわかる授業づくりをどうしていけばいいのか、その一つの方法として京都府総合教育センターでは、平成 25 年度はすべての子どもが「わかる・できる」を目指す「ユニバーサルデザイン授業」に

において、特別支援教育の視点を加味するとはどういったことなのか、具体的にどのような方法で授業をつくっていけばよいのかという研究成果（平成23・24年度研究）を、京都府内の各学校に伝達・広報することとした。

2 方法

平成23・24年度の研究においては、研究プロジェクトチームで研究成果をまとめ、研究冊子を作成して府内全域の各学校に配付している。

平成25年度は、配付した研究冊子についてセンターだよりやHPで活用を勧め、センター各研修講座や出前講座で内容について伝え、その他研究会等でも発表を行う等、「ユニバーサルデザイン授業」についての研究成果を、さまざまな機会や場面をとらえて広めることとする。

3 発信内容とその実際

(1) 研究成果として発信する内容

ア アセスメント

特別支援教育の視点によるアセスメントを授業づくりに活かすことが大切である。

(ア) 学級のアセスメント

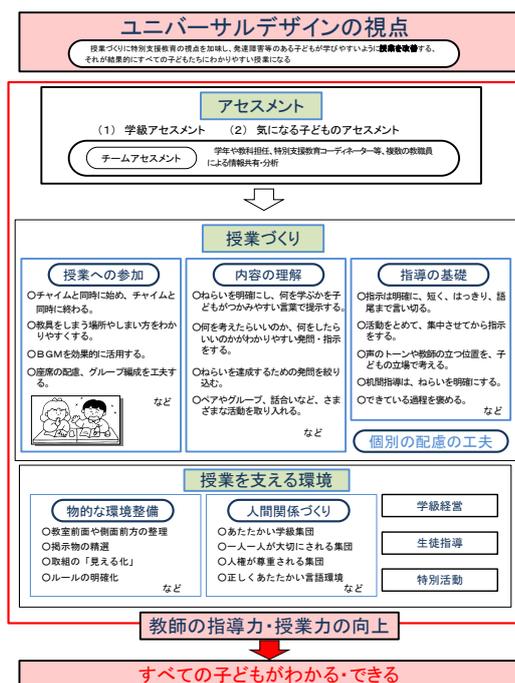
みんながわかる授業づくりを進めるためには、気になる子どもの支援についての検討だけでなく、まず学級全体の様子を把握する必要がある。

(イ) 気になる子どものアセスメント

授業改善のために、学級のアセスメントを行った上で、特に心理的な要因や社会性の学びの不足、発達障害等で特別な教育的ニーズのある子どもについてはその特性をしっかりと把握する必要がある。問題行動は、環境との相互作用で起こることが多いため、学級全体が落ち着き、授業がわかりやすくなると減少していくことも研究協力校の実践で確認できた。

(ウ) チームアセスメント

学年や教科担当者、特別支援教育コーディネーター等の複数の目で情報の共有（チームアセスメント）を行うことが学級や気になる子どもの実態をとらえる上で有効で



ある。

学級の特徴や個々の子どもの関係、学習環境といった総合的な観点から検討することが効果的である。

イ 授業づくり

ユニバーサルデザインの視点を明確にした授業づくりに取り組むことにより、どの子にもわかりやすい授業づくりを進めることができる。

(ア) 授業への参加

- ・ 定刻に始め定刻に終わる授業・・・授業時間の確保と授業内容の工夫へ
- ・ わかりやすい授業ルール・・・学級の落ち着きと支援効果の高まりへ
- ・ 教具のしまい方を表示・・・授業の流れから外れることのない参加へ
- ・ タイマーやBGMの使用・・・見通しと次の活動への気持ちの切り替えへ
- ・ 授業の流れの表示・・・始めと終わりの明確化へ
- ・ 座席の配慮・・・学習への参加の効果的な促しへ

(イ) 内容の理解

- ・ ねらいの明確化・・・子どもが具体的にイメージできることで達成感へ
- ・ 発問や指示・・・教材分析を十分に行い、子どもが考える活動を生み出す形へ
- ・ 板書・・・授業内容をより理解するための重要なポイントとして
- ・ ワークシート・・・効果的な活用で授業への参加と理解の深化へ
- ・ 挿絵や動作化・・・教材文や学習課題の理解促進へ
- ・ グループやペアの活動・・・子ども同士のかかわりと学習活動参加の促進へ

(ウ) 指導の基礎

- ・ 発問や指示・・・注目しやすい状況づくりと視覚的に示すなどの工夫
- ・ 指示の出し方・・・聞き手である子どもを意識した指示の工夫

ウ 授業を支える環境

(ア) 物的な環境

校内や教室の掲示物、備品の整理整頓も落ち着いた環境づくりに重要な要素となる。ゴミや不要なものが置かれていないことはもちろん、視覚的な刺激に対して反応したり、注意集中が難しかったりする子どもには、掲示物や教室備品がすっきりと整理され、黒板は常にきれいにしてあり、日付や1日の予定とその変更等、必要な項目のみが書かれているということが、落ち着いた環境作りに重要な要素である。

(イ) 人間関係づくり

お互いを認め合い支え合う学級の中では、落ち着いて安心して授業を受けられる。安心で安全な学級、暴力的な言葉づかいや差別的な言葉づかいのない学級の中で授業を受けられるという基盤があって、子どもたちは自分の考えを伝えたり、自分の学び方で問題に取り組んだりすることができる。発達障害等の有無にかかわらず、お互いが認め合い支え合う学級づくりが大切となる。

(ウ) その他

学校すべての取組の中で、明確化や「見える化」などユニバーサルデザインの視点を盛り込み、全教職員が一致して進めていく工夫が必要である。

わかりやすい学校生活の流れやスタイルづくりは、子どもだけでなく、教職員にとってもゆとりのある行動に結びつく。授業開始5分前の予告や、掃除開始の合図として毎日同じ時間に音楽を流すなど、学校生活の流れのパターン化が工夫できる。

学校全体であいさつやベル着の取組が定着することで、子ども同士のやりとりが活性化したり、授業がスムーズに始められたりするなどの効果がある。また、誰にでもわかる工夫は教室だけでなく、児童会活動や行事でも導入することによって学校生活全体が落ち着くと、その落ち着きは教室にも伝わるというプラスの循環へとつながっていく。

エ 教師の指導力・授業力の向上

研究で研究協力校の先生方は、子どもの「学び方」や「物事のとらえ方」などの特性に目を向け、どうすればわかるのか、どうすればできるのかを検討し、支援につながるものを整理されたが、その中には以前から行われていた配慮や工夫も多く含まれていた。こうした普段から行っていた「わかりやすさ」のための配慮や工夫も、その効果を確認し、確実に続けることで必要な支援と意識され、授業に意図して組み込まれることにつながった。

このような取組を続けることで、先生方の子どもへの視点も磨かれていき、授業が目に見えて改善される。また、変化が見られたのは授業だけではなく、先生方自身が普段から「わかりやすさ」ということに気を配り、すべての指導場面で自らの働きかけは適切か、指導の意図が子どもに届いているか意識することで、指導の在り方にも効果が表れる。そして、これら「わかりやすさ」への意識は、教室環境をはじめ、学校全体を包み込むように波及し、さまざまな取組の改善にも及んでいき、教師力の向上につながる結果となる。

オ ユニバーサルデザインの視点を加味した学習指導案の作成

ユニバーサルデザインの視点は授業を行う上で基礎・基本となる。この視点を加味

した実際の授業実践こそが大切である。

研究協力校2校による指導案モデルとあわせて指導案づくりの手引きを作成し、示している。

(2) 発信の実際



ア 研究冊子「ユニバーサルデザイン授業～発達障害のある子どもも含めて、どの子どもにもわかりやすい授業～」

研究冊子「ユニバーサルデザイン授業～発達障害のある子どもも含めて、どの子どもにもわかりやすい授業～」は府内小・中学校全教職員に配付するとともに、幼稚園、高等学校、特別支援学校にも配付した。また、研究まとめ詳細版と併せて京都府総合教育センターHPに掲載し、必要に応じていつでも見ることができ、活用することができるように環境を整えている。

イ 京都府総合教育センターの各研修講座

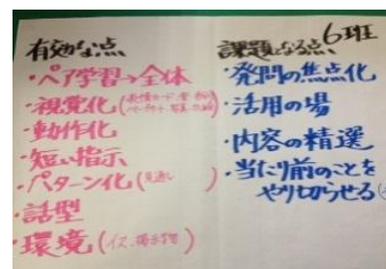
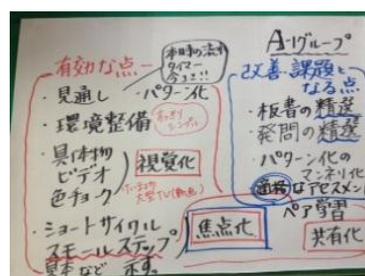
平成25年度初任者・新規採用者研修開講式では、全初任者・新規採用者に研究冊子を配付し、「ユニバーサルデザイン」教育についての考え方を講義として実施した。また、各校種別初任者・新規採用者研修講座の中でも「ユニバーサルデザイン授業」についての講義を実施した。

平成25年度領域の研修講座では『特別支援教育「中級・授業づくり（通常の学級）」講座ーユニバーサルデザイン授業ー』講座を企画した。講座内容として

- ・小・中学校の実践発表
- ・受講者の勤務校での取組状況の交流を中心に「有効な点」と「課題となる点」を協議
- ・演習としてグループごとにポスターを作成の3点を実施した。

講座をとおり、「ユニバーサルデザイン授業」の実践ポイントについて共有した。

その他実施した特別支援教育研修講座22講座においても、ユニバーサルデザイン授業の視点を内容に取り入れたり、解説を入れたりして、各校の実践に生かせるようにした。



ウ 京都府総合教育センターの出前講座

平成25年度、京都府総合教育センターの出前講座において、「ユニバーサルデザイン授業」を研修内容として取り上げることを「研修講座の概要」等で広報した。その結果、平成25年度に特別支援教育部に依頼された42件の出前講座の内、約80%がユニバーサルデザイン授業に関するテーマまたはユニバーサルデザイン授業の内容を含む依頼であった。この出前講座により、全校種にわたって、教職員約1000名程度が講義・演習を含む研修を受けたこととなった。

受講後の感想からは、

- ・自分のしていることを整理し、その中から学校のスタンダードとなるものをつくりあげていきたいと思った。
- ・改めてどのような視点で授業を組み立てていけばよいのか振り返ることができた。ちょっとした工夫ですべての子どもたちにわかりやすい授業になるので、一つ一つの視点で考え直したいと思った。
- ・日常の中で当たり前に行っていることにも「意図を持つ」ことの大切さを感じた。自分の振り返りをする機会も大切にしていきたいと思う。
- ・ユニバーサルデザインは、生徒のためになり、また自分の授業を研究するよい機会になるので意識して取り組んでみたいと思う。

等の感想が見られ、出前講座で、ユニバーサルデザインの視点について確かめ、実践について学校全体で共有することが有効であるということが伝えられた。

エ 各研究会等への発信

平成25年度京都府特別支援教育研究協議会の夏の発表会「サマープレゼンテーション」では、研究内容をポスターにまとめ、展示発表を実施した。

日本LD学会第22回大会において、自主シンポジウムとポスター発表を行い、研究についての報告を行った。自主シンポジウムには140名を超す参加があり、研究協力校2校の実践や研究プロジェクトの組織や内容について報告した。質疑として、

- ・小・中学校の連携の取り方
- ・全校の取組にしていくポイント

が出され、福知山市のグランドモデル事業の成果や子どもの困りから指導を見直す取組等、研究に京都府の事業成果も重ねて応答をした。取組を進めておられる方からの質疑が中心となり、具体的な実践が全国的にも広まっている様子を知ることができた。

また、第37回全国特別支援教育センター研究協議会（山形大会）において分科会発表を行い、京都府の「ユニバーサルデザイン授業」研究を元にユニバーサルデザイン教育について協議をした。協議では、

- ・各都道府県でユニバーサルデザイン授業についての取組が進んでいる
- ・「理解」から「授業づくり」へのニーズの高まりがある

- ・エビデンスデータがなく、何となく感覚として「効果がある」ととどまっていることより、ユニバーサルデザイン授業と学力向上とのリンクをエビデンス的に示す必要がある
- ・高等学校における特別支援教育を検討する必要がある
- ・「焦点化」は教材研究そのものであるが単元を貫く言語活動との整合性の難しさがある

等の現状が出された。加えて全国の教育センター等において、京都府総合教育センターのHPで研究成果の閲覧・活用をされていることが確認できた。

4 まとめ

全校で取り組むユニバーサルデザインの研究は、子どもたちにとって授業ばかりでなく、学校生活全体がわかりやすくなる取組となった。授業及び学校生活全般を広く指導していく基礎・基本が「ユニバーサルデザイン授業」の中には含まれており、その内容を全教職員で確認し、意図して指導に組み入れていくことで、学校全体としての共通した指導につなげることができる。共通した指導が児童・生徒に明確に伝わることで、児童・生徒にとって、学校生活全体が「わかりやすさ」につながっていく。

研究チームのモデルは、各地域支援センターが巡回相談等を通じてより具体的に担当地域の小・中及び高等学校に、授業改善を支援する方法の参考として提示することができる。今後も各学校の体制づくりや授業づくりを応援する形で、より積極的に地域各校の支援につなげ、積み上げていきたい。

京都府総合教育センターでもさまざまな機会を活用し、全校種でのユニバーサルデザインの授業づくり、全ての子どもがわかりやすい授業づくりを進める発信を続け、各学校の支援を行っていく。教員の世代交代、異動等の多いこの時期に授業づくりのポイントとなる視点の見つめ直しや確認を全教職員で共通理解する機会をつくっていくことが大切である。その意味では、各校で実施している出前講座も各教育局や市町教育委員会に働きかけ、各中学校区での実施にする等の工夫をし、校種間の連携にも役立たせることができると考える。小・中学校間で「ユニバーサルデザイン授業」の視点を取り入れ、共通した指導が築ければ、小・中学校間でのスムーズな移行がより一層進められるかと思われる。

今後さらに研究協力校2校以外にも広がりつつある「ユニバーサルデザイン教育」についての各校の実践を調査収集し、センター実施の研修講座でパネルディスカッション等の形で発表の機会を設定する等、各校での研究の推進及び取組のきっかけをつくることで、さらに府内の実践が広がるよう、発信を企画し実施していきたいと考える。

参考文献

京都府総合教育センター（2013）「ユニバーサルデザイン授業」～発達障害等のある子ども

を含めて、どの子にもわかりやすい授業～，京都府総合教育センター。

小冊子・詳細版 <http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/>

桂聖（2011）「国語授業のユニバーサルデザイン」全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり，東洋館出版社。

授業のユニバーサルデザイン研究会（2010）授業のユニバーサルデザインVol.1-4，東洋館出版社。

東京都日野市公立中学校全教師・教育委員会，小貫悟（2010）通常学級での特別支援教育のスタンダード，東京書籍。

河村茂雄（2006）Q-Uによる特別支援教育を充実させる学級経営，図書文化社。